

特集■あのムーブメントは今

ジャズ喫茶・名曲喫茶

富山大学人間発達科学部

森田 信一

ジャズ喫茶や名曲喫茶が街の中にたくさんあったのは、いつの頃だったろう。

ジャズを聴きにジャズ喫茶へ行き、クラシックを聴きに名曲喫茶へ行った人も多かっただろう。そこでは、ホールや演奏会場を再現する高級なオーディオ装置で、LPレコードによる一流の演奏が聴けた。戦前から戦後の一九六〇年頃までは、録音時間が片面三分半のSPレコードだったが、LPの時代となると片面三十分近い録音時間となり、音質もほとんど良くなったようだ。高級なオーディオ装置もレコードも高価であった時代、これらの喫茶店は、ジャズやクラシックの音楽ファンにとって欠くことのできない、レコードによる音楽鑑賞の場を与えてくれていた。

戦前の大正時代にまで遡ると、どちらのジャンルの音楽も、レコードが生演奏と並行して日本に入ってきたわけで、欧米におけるよりもレコードが生演奏に優先する傾向があった。なにしろ外から入ってくる文化だから、

来日する演奏家も多いわけではない時代、レコードでこそ超一流の演奏が聴けた。それによつてレコードを非常に重視するという日本独特のレコード文化・レコード芸術というのが作り上げられていった。そしてもう一つ、これらの喫茶店が音楽を聴くための店であることからくる約束がある。おしゃべり禁止である。これは店側の決めた規則であると同時に、真剣に音楽に耳を傾けることを目的として来店している客からの要請でもあるという。こうしたことから、ジャズ喫茶も名曲喫茶も、一流の演奏に接することのできる音楽鑑賞のための空間という独特な場を作り上げた。

一九八〇年代になって、カセットテープによるウォークマンやCDの時代になってくると音楽の聴き方が変わり始め、MDを経て、今やiPodに代表される携帯音楽プレイヤーが主流となっている。CDや音楽データが安価になったと同時に、移動しながら聴くとい

う環境では、生の臨場感を鑑賞するような音質へのこだわりも薄れてきている。こういう環境の中で育った若者は知らないかもしれないが、数少なくなつたとはいえ、実は今でもジャズ喫茶や名曲喫茶は現役である。

そこで今回、これらジャズ喫茶、名曲喫茶について、その歴史的経緯を振り返ってみる方法として、ジャズ喫茶と名曲喫茶を訪ねて、経営者の方にインタビューした。それらの店の個別の歴史の中から、他の多くの店にも共通する歴史の流れを見ることができののではないだろうかと考えた。今回、東京にあるいくつかの店の中から、四谷のジャズ喫茶「いーぐる」と、高円寺の名曲喫茶「ネルケン(Nelken)」を訪問させていただいた。いずれも長い歴史を積み重ねてきた店である。

ジャズ喫茶「いーぐる」

JR四谷駅の新宿方面出口、つまり上智大

学と反対側へ出て新宿方向へ百メートルほど進むと、右に「いーぐる」の看板がある。階段を地下へ降りて行くと店のドアがある。この店は一九六七年に開店した。経営者の後藤雅洋氏はジャズ評論家としても活躍されていて、雑誌への執筆の他、何冊かの著作も発表している。

開店当時、レコードの価格は千八百円ぐらい、輸入盤はもつと高価だったという。他の物価が五倍以上になっている現在、レコード（CD）の価格は二倍にもなっていない。輸入盤は逆に下っている。今の感覚からいえば、当時レコードは一万円以上だったということになるだろう。多くのレコードを聴くことのできるジャズ喫茶の意義は大きかったといえ



“いーぐる”の経営者・後藤氏(上)と店の様子(下)

るだろう。後藤氏が店を開いた六〇年代後半は、ちょうどベビーブーム世代が成人に達した時期で、政治、社会、文化面で新しいエネルギーがあふれ出した時期だった。ジャズはそういった新しい時代の象徴のひとつとして捉えられていたという。演劇、舞踏、美術、音楽などを担う文化人が出入りし、「天井桟敷」や「状況劇場」などアングラ芝居のポスターが店に持ち込まれた。

そしてまたこの時代の大きな動きは学生運動である。ジャズ喫茶にはセクトの活動家も出入りしていた。複数のグループのメンバーが来店していたことは、トイレの落書きからものはっきり認識できたという。四谷という場所柄、市ヶ谷の法政大学や早稲田大学の学生運動のメンバーが活動から離れて、「いーぐる」でジャズに聴き入っていたということらしい。もちろん駅の向こうの上智大学でも大学当局に対する学生の異議申し立ては行われていたようだ。学生運動は六九年の東大安田講堂、七二年の連合赤軍事件へと進んでいく。

ジャズという音楽と学生運動の結びつきを探ると、五〇年代末からのアメリカの公民権運動にたどり着くという。

その頃、チャールス・ミンガスやマックス・ローチ、ジョン・コルトレーンといったジャズミュージシャンが人種問題に対して意思表示をし、そのことから、六〇年代になると、ジャズがカウンターカルチャーの側の音楽として日本の活動家や学生にも認識されたというところらしい。この頃、生演奏のジャズを聴かせる店もなかったわけではない。しかし、レコードをかけるジャズ喫茶の方が、本物の演奏、一流の演奏を聴くことのできる場として捉えられていた。

ジャズとジャズ喫茶の変化

ジャズ喫茶は一九六〇年頃から増えていき、都市部からタイムラグをもって地方都市へ波及し、全国的には一九八〇年頃まで増加を続ける。しかし後藤氏は、一九七〇年がジャズ喫茶のピークだと言う。氏の記憶では一九七〇年代に入るとジャズそのものにも変化が起こった。七〇年にマイルスデイビスがアルバム『ピーチエスブリュー』でエレクトリックを使い、七一年にエレクトリックサウンドのグループ、ウェザーリポートが登場した。そして最も印象的だったのが一九七二年に登場したチツクコリアの『リターントゥーフォーエバー』であるという。これはエレクトリックというだけでなく、ロックとのクロスオーバーとしてのフュージョンの始まりである。

一九五〇年代に登場したロックは六〇年代にはアメリカやイギリスの音楽マーケットで大きな勢力となってきた。そしてジャズにもロックのエイトビートが取り込まれることになった。

このフュージョンの登場によって「ジャズ音楽のジャズバー化」といわれる傾向が強まり、ジャズをBGMとする飲食店へと衣替える店が増えていくことになる。このことから、七〇年代以降のジャズ喫茶の増加にもかかわらず、じっくり音楽に耳を傾けるという聴き方を前提とするジャズ喫茶のピークは一九七〇年であると後藤氏は捉えているわけだ。

八〇年代になるとバブルも手伝って、ジャズフェスティバルが開かれるようになり、ジャズの大衆化が進んだが、それにつれて今では、フュージョンでなくともジャズ全体がBGMとして扱われるようになっていく。十年前に起ったカフェブームでは、カフェミュージックとしてボサノバがBGMとしてクロージングアップし、盛んに使われたが、カフェブームも去り、今BGMはジャズが多い。居酒屋、カフェなどいろいろな業種の店でジャズがかっている。またジャズは、学校のブラスバンドにも入り込んでいる。二〇〇四年にヒットした映画『スウィングガールズ』も記憶に新しい。一九三〇年代のビッグバンドジャズのレパートリーが、学校の吹奏楽のジャズのレパートリーとして演奏されている。ジャズ

に対する意識の変化が感じられる。

名曲喫茶、ネルケン(Nelken)。

JR中央線の高円寺駅は、一九五七年以来、毎年八月末の二日にわたって阿波踊りが行われていることで知られている。既に五十年を越える歴史である。また、北口の広場の左手向かいには、ねじめ正一の小説『高円寺純情商店街』から命名された「純情商店街」がある。今回は逆の南口へ出る。まっすぐに南へ向かう通りに平行して、右手にアーケードになったパル商店街が長々と続いている。このアーケードを百メートルほど進むと、右に曲る最初の小路がある。ここを右折していくと、五十メートルほど先の右側に山王山長仙寺の大きな門があり、左に幅広い道がある。これは寺の参道なのだろう。この道の右側の二件目が名曲喫茶ネルケンである。

たくさん緑に囲まれた入り口のドアを押して店に入ると、高い天井と、たくさん飾られた絵画や彫刻が目に入る。赤い高級な布張りの椅子席が配置されており、奥にはカウンター席もある。気品のあるご夫人がここを経営されている。一九五五年に、クラシック好きのご主人と一緒に設計してこの店を作られたという。クラシック音楽鑑賞のため、ゆったりとした座席の配置とホールのような響きを目指して設計されたとのこと。確かに当

時はコンサートも少なかったし、高級なオーディオ装置もたくさんなかったはずだ。こういう名曲喫茶が、本格的なクラシックの鑑賞の場として、大切な役割を持っていた。この店には、おしゃべりは小声でならかわないが、リクエストをかけている時は静かにというルールがある。

昭和の時代、多彩なお客が出入りしていたという。一般の音楽愛好家に加えて、作曲家、演奏家、そして音大生にとっても、勉強中の曲を聴くためのライブラリーのような場所であったようだ。演奏家はコンサートに向けてのスコアのチェックに利用していた。またこの店は画廊も兼ねているので、絵や彫刻がたくさん飾ってある。だから画家もよく来ていたし、また詩人や小説家の仕事場でもあり、文学青年のたまり場でもあったとか。今はそれぞれの分野で著名人になっている方も多いとのこと。リクエストの多いレコードはついには痛んで、また同じものを購入する必要も生じた。名曲喫茶は文化を育んだ場であったわけだ。

名曲喫茶、その後

八〇年代になってCDが登場してからは、幅広い多彩な演奏家の録音が入手しやすくなったが、LPに代って登場してきたCDは、

空気の伝わりやふくらみ、やわらかさの点で、微妙な情緒が無いように感じられたとのこと。

CDはデジタルだからアナログのLPよりも優れているはずだと考えられているが、1秒の時間を44100に分割してサンプルし、その切り口を読み取った数値を16ビット、つまり65000ほどの数字のうちの一番近い値として記録するという原理だから、精密であるとはいえ近似値が記録される。再現される時は、サンプルした点と点を滑らかに結ぶという近似をすることになる。こういった処理を経てスピーカーから出てきた音が、人間の聴覚を通して感性にどう伝わるのかは未知の部分もあるだろう。それだけでなく、最

近のMP3を始めとするMP3などの圧縮技術では、もっと莫大な量のデータを省略しているわけだ。

八〇年代以降は、音楽ホールもたくさん作られ、名曲喫茶も寂しくなっていた。レコードの価格が手頃なものになり、CDも登場した。オーディオ装置も、ミニコンポ、ラジカセ、カセットウォークマン、MDへと小型化していった。音楽鑑賞の環境が手軽な方向へ変化するとともに、音質へのこだわりは少なくなっていた。

しかし最近、リバイバルの動きもある。団塊の世代のリタイアに伴って、本格的なオーディオ装置が復活してきている。時間に余裕のできた人たちが、かつて憧れたアンプ、スピーカー、レコードプレイヤーなどに関心が戻ってきているのだ。音のクオリティへの関心が見直されている。

喫茶店の形も変化してきた。

一九八〇年のドトール誕生がきっかけとなって、たちまちセルフサービスの形が広まった。次に、アメリカのシアトルスタイルのカフェが日本にも広がり、一九九六年にスターバックス、九七年にタリーズがチェーンを展開し始める。それ以降、手軽さとファストフード的な感覚へ

と喫茶店の形が大きく変化したのだが、逆に、書斎のようにじっくり仕事をしたりくつろいだり、あるいは打ち合わせのできる店が減ってきてしまっている。ここへきて原稿の執筆や読書の空間として、名曲喫茶を始めとする落ち着いたスタイルの喫茶店が、もう一度求められているはずだ。

出かけてみよう

今回訪問したジャズ喫茶「いーぐる」、名曲喫茶「ネルケン」はそれぞれ一九六七年、一九五五年以来、営業を続けてきた店である。他にも東京には何軒かの店がある。地方都市にもよく知られた店があつて、観光の折に訪れる人もあるようだ。こういった店を探すには、今ならばインターネットが役に立つ。店そのもののホームページがなくても、いろいろな人がブログ等で紹介した記事に行き当る。少しまとまった時間ができたら、こういう店を訪れてみるのも楽しいのではないだろうか。高級オーディオで、一〜二時間、ジャズやクラシックにじっくり耳を傾けるということは、自宅の部屋ではなかなか実現できない時間の過し方である。きっと何か新しい発見が待っているに違いない。

文献「ジャズ喫茶リアル・ヒストリー」後藤雅洋著、河出書房新社二〇〇八



ネルケンの外（上）と店内（下）